

# 子どもが主体的に学び、 確かな学力を付けていくために

～ 基礎・基本の確実な定着を目指して ～

奈良市立東市小学校

本校は以前から人権教育を中心とし、特に「人権・部落問題学習の確かな実践」「質の高い仲間集団の育成」「低学力を克服する豊かな実践」を三本の柱として取り組んできた。しかし、児童の学力面に目を向けると厳しい実態があった。

- ・学力の下げ止まりはできているが、底上げができていない。
  - ・学力の二極分化。
  - ・学級崩壊や授業不成立といった厳しい実態。
  - ・高校受験のとき、卒業生が低学力のために希望校に行けない、高校へ進学できないという課題。
  - ・小学校や中学校での低学力傾向の児童生徒の荒れ、将来への展望がもてない実態。
- また、学校評価アンケートの「子どもは授業が分かりやすいと言っている。」という項目では、肯定的な回答は60%にすぎなかった。

そこで、これまでの取組を再度見直し、2005年度に「東市リバイバルプラン（再生計画）」を立ち上げ、次のような児童を育てたいと考えた。

- 「確かな学力の育成」により、児童の将来を保障し、展望をもたせたい。
- 「確かな人権意識・人間関係の育成」「確かな生活規律の確立」により、児童が社会に出て、たくましく生きることができるようになりたい。

以上の二点を柱とし、

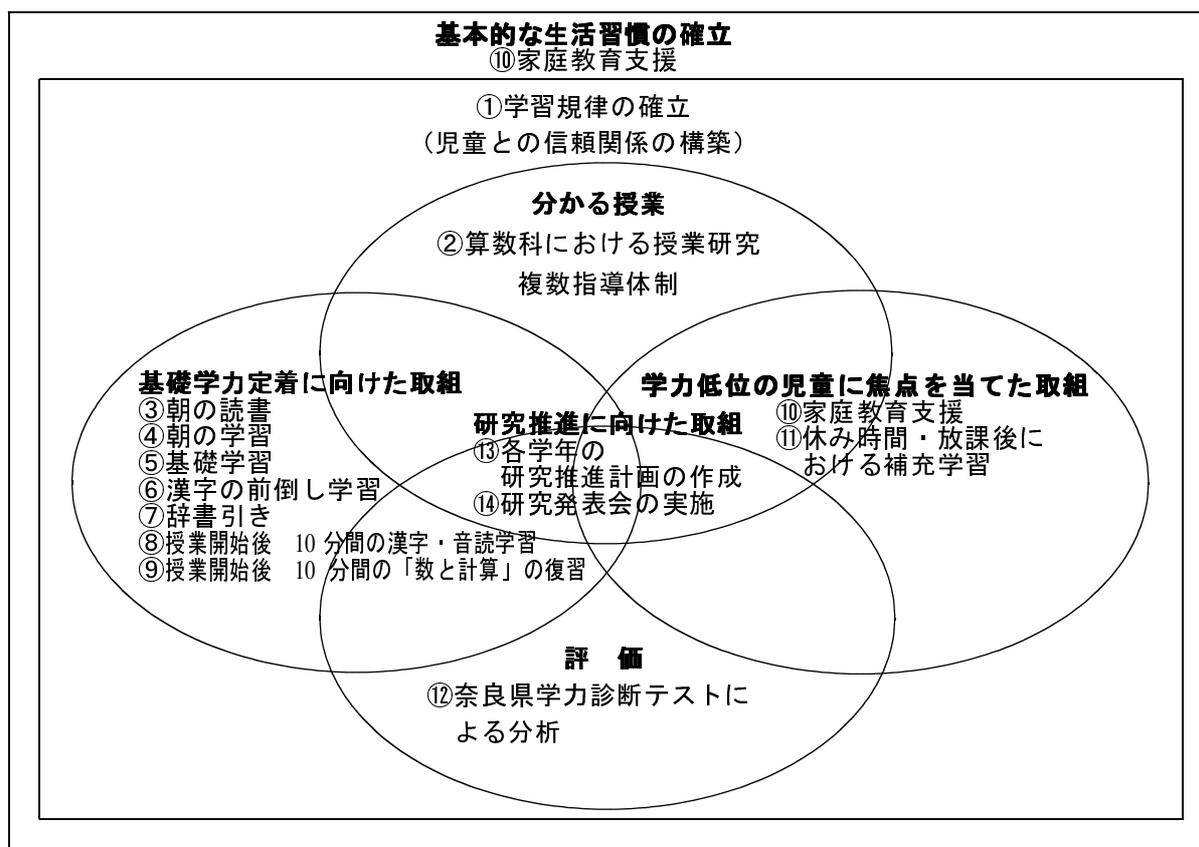
- ①複数指導や少人数指導による教科学習を構築し、確かな基礎学力を付ける。
- ②家庭と連携しながら、よりよい家庭学習を創造し、確かな基礎学力を付ける。
- ③人権学習のレディネスを明らかにし、人権の基礎体力を付ける取組を創造する。
- ④人間関係づくりの課題を明らかにし、人間関係づくりの基礎となる力を付ける取組を創造する。
- ⑤家庭・地域と連携しながら、新たな地域教材づくりによる児童に届く人権・部落問題学習を目指す。

この五点を基本方針とし、取組をスタートさせた。同時に文部科学省の「学力向上拠点形成事業」（2005～2007年度）、「学力向上実践研究推進事業」（2008～2010年度）の研究推進校として、研究実践を進めてきた。

研究を進めるに当たっては、これまでの取組から、明らかになった「活動を伴った授業を行うと定着しやすい。」「集中力を持続させるためには、具体物の活用がよい。」や、「3、4人の班活動の中で、『ねりあう』学習の強化」などを取り入れ、授業を成立させる上できわめて重要と捉える**学習規律の確立**をメインとしながら、**基礎・基本の確実な定着**を目指した研究実践を、算数科を中心に進めてきた。

(1) 取組の実際

① 学力向上に向けた構想図・具体的な取組



② 学習規律

○学習規律の確立に向けた取組

<意義・留意事項>

- ・学習規律は、授業を成立させる上で極めて重要である。
- ・授業者は、学習規律を守れない児童に対しては、毅然とした態度で指導する。
- ・全職員が、共通理解の下に全児童を指導する。

<取組>

- ・月1回の主題研究推進委員会で、児童の実態を確認する。
- ・学習規律の月目標を設定し、「学習規律チェック表」を基に達成率を算出し、翌月の目標を設定する。また、効果のあった実践は、学校全体に紹介し交流する。
- ・「東市っ子の学校生活」を使い、全クラスで指導するとともに保護者にも理解を求める。



③ 分かる授業

○算数科における授業研究・複数指導体制

<意義・留意事項>

- ・オーソドックスな授業展開で、「子どもが高まっていく授業」を目指す。次の段階として、「広がり・豊かさ・面白み」をもたせた授業を目指していく。
- ・児童にとって分かりやすい授業の在り方について追究する。
- ・授業者として大事にすることを共通理解する。
- ・算数科の授業スタイルの共通理解をする。
- ・つかむ（課題提示・見通しをもつ）→考える（自力解決）→ねりあう（集団解決）→



まとめ（一般化・適用）

<取組>

- ・「数と計算」の領域に絞って研究を深める。
- ・年数回の全体公開を通して、授業における効果的な評価の方法や発問の仕方について研究する。
- ・授業における「ねりあう」部分を充実させる。
- ・3、4人の班活動の中で話し合い、「ねりあう」部分を強化する。
- ・T・Tを原則とした複数指導を行い、学力差が大きい学年・単元においては、より個に応じた指導ができる習熟度別授業も追究する。
- ・総合的な学習の時間における調べ学習で、班で話し合い、意見をまとめる。
- ・総合的な学習の時間に、同じテーマで取り組んでいる他校と、テレビ会議を通して意見交流する。

④ 基礎学力定着に向けた取組

- ・朝の読書 ・朝の学習 ・基礎学習（第3学年以上） ・漢字の前倒し学習（第3学年以上） ・辞書引き（第3学年以上） ・授業開始後10分間の漢字 ・音読学習 ・授業開始後10分間の「数と計算」の復習

<意義・留意事項>

- ・児童の基礎学力を様々な取組を通して向上させ、学力向上を図っていく。
- ・特に「基礎学習」の時間では、今までに学習しているが定着の図れていない単元・項目について、教科の枠を超えて振り返り学習をする。
- ・6年間を見通した、各学年における「1年間の『基礎学力定着に向けた取組』で児童に付けさせたい力」を明確にする。
- ・各学年の研究推進計画において、各取組における具体的な学習内容を決め、計画的な学習を行う。

⑤ 低学力の児童に焦点を当てた取組

○家庭教育支援

<ねらい>

- ・基本的な生活習慣の確立に向けて、支援する。
- ・自立学習ができるように、家庭学習の定着に向けた取組を行う。
- ・家庭状況を把握し、保護者との信頼関係を築いていく。

<啓発方法>

・保護者への啓発

「家庭学習の手引き」を持って、定期の家庭訪問に行く。

「学年通信」「校長通信」「ホームページ」「PTAからの広報紙」での啓発。

懇談、「親の会」での啓発。

・児童への啓発

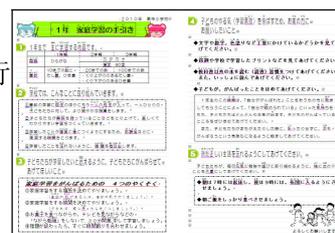
第3学年以上で、毎日「生活記録票」を記入し、「早寝・早起き・朝ご飯」「テレビ・ゲームは1日に2時間まで」の啓発を行う。

○休み時間・放課後における補充学習

<ねらい>

- ・現学年の学習内容で理解できていないところがある児童に対して、補充学習を行う。

<取組>



- ・休み時間に学年部で指導。
- ・家庭学習ができていない児童に対して、家庭学習をさせる。
- ・持ってくるのを忘れた児童も、その日の内に宿題をさせる。
- ・放課後学習30分程度、学年部で指導。
- ・低学力児童への学力補充を行う。
- ・毎月第2週に学力補充を実施する。



## (2) 3年間の取組の成果と今後に向けて

「子どもが主体的に学び、確かな学力を付けていくために ー基礎・基本の確実な定着を目指してー」を研究主題として取り組んで6年目を迎えた。その成果と課題、今後の方向性を整理することとする。

### ①成果

- 学校体制としての学力保障
  - ・「数と計算」領域の技能の習得
  - ・漢字の定着率の向上
  - ・県学力診断テストの全校平均点の向上（県平均に近づく）
- 学習規律・生活規律の定着、学校生活の落ち着き
  - ・朝読、朝学からスムーズな学習への誘い
- 保護者の肯定的評価の高まり
  - ・学校満足度 66%（2004）→ 84.9%（2010）
  - ・「子どもは、授業が分かりやすいと言っている」  
60%（2004）→ 74%（2009）→ 84.1%（2010）
  - ・「学校は『朝の学習』『放課後学習』などで学力向上に努めている」  
66%（2009）→ 93.5%（2010）
- 地域の眼差しの変化
  - ・夢・教育プラン協議会の活動充実
  - ・学校の環境整備を地区社協の年間計画に位置付ける
  - ・スマイルガーデン（花壇）周辺の草刈り、木の剪定の実施
  - ・校舎内ペンキ塗りの実施



### ②課題

- 全校平均がまだ県平均を下回っている現状
  - ・文章題・応用問題の正答率の低さ（語彙力・読解力の弱さ）
- 自ら学ぼうという姿勢・探究心の弱さ
  - ・ねりあい（集団解決）が充実したものになっていない
- 家庭的に厳しい課題を抱えている児童は、結果が出にくい

### ③今後の方向性

- これまでの取組の中で定着したものを継承しながら、“言語活動”に重点を置いた取組を構築していく。
- 家庭的に厳しい課題を抱えている児童が始業時刻までに登校し、基礎学力定着に向けた朝の取組（朝の読書・学習）に参加できるよう地域にも協力を求め、地域と共に組織的に動ける体制を構築していく。